

基調講演

## 人口減少社会と現代宗教の課題

櫻井 義 秀

櫻井 ただいまご紹介いただきました櫻井と申します。大体一時間半くらいになるかと思いますが、よろしく  
お願いいたします。

### 一 人口減少社会とは何か

「人口減少社会」という言葉でありますけれども、これは、この数年来、いろんな方が、今後五十年の間に日本全体の人口が減っていくと紹介されているとおりです。「現代宗教の課題」ということですが、これに関しては、個別宗教、個別宗門、あるいは、個別寺院にとつての課題として人口減少時の社会との関連で考えていくということですが、地域で人が減っていく。檀家が減っていく。その結果寺院が成り立たなくなっていく。どうしたらいいだろうかという問題の設定では、いろいろ議論がされてきたと思います。

しかしながら、社会全体に宗教がどういう役割を果たしていくのか、今後五十年で何ができるのかという議論はまだまだ足りないと思います。簡単に言えば、自分のサバイバルについて考えるのは当然でしょう。しかし、日本社会のサバイバルを考える時期ではないでしょうか。そういう形で考えていかないと、あまり建設的な議論にならないの

ではないでしょうか。

この「人口減少社会」に関しては、二〇一四年九月二日号の『エコノミスト』という週刊誌に、「とことん考える人口減」という特集が出ておりまして、日本社会全体のマクロな予測というのが出ています。しかしながら、個別地域で一体何をやっていけばいいのか、具体的な対策が実はあまりありません。里山を中心とした、環境に配慮した地域づくりでうまくいっている事例は紹介されています。全国にこういった中山間地域は幾らでもあるわけですが、具体的などこそこではどうしていったらいいのかという話はあまりなされていませんね。地域にとつての人口減という現象が一体何をもたらすのか、どうしたらいいのかという議論にはなっていません。簡単な話、『エコノミスト』を主として読むのは、企業人や東京で働いたり、全世界を相手に働いている人ででしょうか、他人事という感じもします。この中で、消費税の問題についても論じられています。安倍政権が予定どおりに消費税を上げるのかどうなのかという。ここに二人の論者が出ておりまして、一人は、消費税を予定どおりに上げると、景気が腰折れになってしまうのでまずい、先送りにすべきではないかと。もう一人の方は、人口が減っていくということは、現役世代、いわば高齢者を支える人たちが減っていくことだから、先を見越して福祉制度を維持するために消費税を上げていかなきゃいけない。そうしないと、将来の現役世代に負担を先送りすることになるんだという、極めてまっとうな議論が掲載されています。しかし、全体としては、景気をどうするかということに議論が集中しています。この景気というのは、直近の三か月、半年の景気であります。しかし、この人口減少社会というのは、本日、三原先生が基調報告でおっしゃられたように、この先五十年の話ですね。ですから、三か月、六か月先の景気と引き換えにはできない話だと思います。この五十年先を考えた時に、日本全体で、地域で何をすべきなのか。あるいは、現代宗教で何を考えるべきなのか、このことを考えるべきではないかと思えます。

私は今日の話において、幸福の話を入れ込もうと思っっています。現職のご上人様方を前に、幸せなどというベタな

話をなんで一般の人がするのかと思っっている人もいらつしやるかもしれません。しかし、幸せというのは考えてみると、結構深い話、難しい話です。幸せを考えることで、社会に対しては何をしていくのかということがより明確になっていくのではないのでしょうか。そういう問題意識を皆様に共有していただきながら、話を進めさせていただけようと考えております。

話の順序としては、「人口減少社会」がどういうものを最初にご紹介して、それから、日本人の幸せ、幸福論をしまして、最後に、現代宗教の役割がどの辺にあるのかということをお話しします。

「日本の人口の推移」のグラフでは、一九五〇年から二〇六〇年、約百年間の人口の変化を示しています。人口は二〇〇八年まで増え続け、約八千万人強から約一億二千万人になったわけです。そこから今度は、八千万人半ばくらいまで減るだろうということが予測されています。戦後、日本は経済発展を遂げて、一九七〇年、八〇年くらいには、エズラ・ヴォーゲルというアメリカの学者が、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」ということを言いました。日本の経済成長が飛躍的に伸びていった時期であります。

そのころ、日本は科学技術においても、経済力においても、非常に自信に満ちていた時代でした。日本がこれだけ伸びるのは日本人が優秀だからだと思っていました。そんな意気込みをもって頑張ってきた時代だと思っのですね。しかしよくよく考えてみますと、今、中国は経済的に非常に伸びていますけれども、中国の人も、中国が非常に優秀であるから経済的に伸びているという話になりますし、ベトナムの人も同様です。

このことをもう少し人口学的に考えてみますと、働いている人が非常に多くて、扶養する人たちが非常に少ない時は、経済成長が生じるわけです。中国は一人っ子政策を行っていますが、これは実のところ都市部の話でありまして、地方に行けば、一家庭、二人、三人、あるいは、辺境の方に行きますと、三人、四人と子供さんが生まれていまして、中国の出生率というのは現時点で大体一・八くらいです。ですから、中国もいずれは人口が減るのですが、

その減り方というのは非常に緩やかだし、まだまだ働く世代の生産力と消費需要というのが強い。

この発想は、「人口ボーナス」と言われていまして、要するに若い世代、働く世代が多い時期というのは、よほどの障害がない限り経済発展するものだということなのです。その国の人が優秀かどうかということはもちろん前提はされますが、基本的に発展していく。そこから人口の構成が変わっていくと、経済発展のスピードは鈍っていきまして、経済成長がよその地域に移っていくということなんでしょうと思います。成長の時代というのは、日本から東南アジア、あるいは中国、あるいはインドというところに移っていきます。これは時代の流れであって、私たちだけの責任ではないのですね。現代がどういう時なのかということを知るといことは、非常に重要なことだろうと思います。これからの五十年というのは、日本の社会では現役で働く人が減って、扶養される人たちが非常に増えてくる。二〇六〇年には高齢化率三九・六%とされています。

高齢者とは六十五歳以上であるという前提が今はあるのですが、おそらく変わっていくと思います。高齢者の定義も、おそらく、将来的には七十五歳以上くらいにしないと、いろんな意味でもたないと思うのですね。七十歳までは普通に働いて、元気な人はさらに七十五歳まで。ないしは、アメリカのように定年がなくなるかもしれません。非常に大きく社会が変わっていくだろうと思います。

このように、日本の人口構成が大きく変わってきた理由なのですけれども、なぜ人が減っていくのか、少子高齢化が生じるのかですが、一つの要因は出生率の低下という問題です。女性が一生の間に生む子どもがどんどん減ってきました。なぜ出生率が低下するのかということですが、一番の要因は結婚する人の数が減ってきていることです。合計特殊出生率というのは、結婚した女性と結婚していない女性を合わせて、平均で何人のお子さんを生むのかという数値の出し方です。ですから、当然のことながら、結婚しない人の数が増えていけば、いくら結婚している人が二人生んでも、出生率は二・〇以下になります。

さて、未婚率ですけれども、年齢集団ごとに、例えば男性で見ますと、一九二〇年の時点では、二十代後半、二十五歳から二十九歳の間というのは、二五・七パーセントの人が未婚でした。要するに、同世代の四分の三は二十代の後半で結婚しているわけです。ところが、一九七五年くらいから、どんどん未婚率が上がってきました、二〇一〇年の段階では、七一・八パーセントの人が、まだ結婚していません。三十から三十四歳前半の人では、四七・三パーセント、二人に一人しか結婚していません。五十歳でも、二〇・一パーセントの人が未婚。五人に一人は結婚していません、ということなのです。この一九七五年くらいから、未婚率というのが非常に上昇します。これは男性の場合です。女性も似たような傾向を示します。女性の場合は、男性よりも未婚率は低いのですけれども、二〇一〇年の時点でも、五十歳以上の人を見ても、十人に一人は未婚となります。三十から三十四歳の時点でも、三分の一の人は結婚してないという傾向です。この後結婚したとしても晩婚になってきますので、出産可能年齢の幅は限られているので、当然、子ども数が減っていきます。

なぜ日本の若い世代、あるいは若い女性が結婚しないのかというと、日本の男性の意識が男女平等になかなかない。性別役割分業、男性は外、女性は家事・育児といいますが、男性の意識改革が非常に遅れているからじゃないかと言われてきました。今、はっきりしていることは、一九七〇年代後半から八〇年代の景気のいい時代に多くの若者が結婚していました。八〇年代後半から資産格差社会と言われ、九〇年代からは失われた二〇年という景気の伸び悩みの時代が続きます。この時期、未婚率は上昇しました。結婚するかしないかというのは、将来に対する見込みの問題ですので、現状あまり給料が高くななくても、将来上がるといふ見込みがあれば、結婚するという決断は非常にしやすいわけです。

もう一つの要因は、一九七〇年代の中盤くらいから、地方では過疎と言われてきたのですけれども、地方の人たちが、どんどん都市圏に移動していきました。都市圏に移動する理由は、進学・就職です。その後、自分の出身地に戻

らず、都会で生活を始めます。そうしますと、都会は家賃が高い。交通時間が非常にかかる。結婚したとしても、子育て環境ってというのがあまり地方ほど恵まれていないわけです。若い世代がどんどん都市部に流出してきますので、子育て環境に恵まれない人たちが非常に増えていきました。地方では祖父母がいたり、職住近接していたりして恵まれているのですけれども、地方で仕事を探すのが難しくなってきました。グローバル化による地方の産業空洞化です。地方では出生率が高いのですけれども、そこに残れる人たちが少なくなってきました。自分が生まれ育った地域ですっと暮らしていけないということが、結果的に日本の人口を縮小させていくという状況を生み出しているわけであり

ます。

この傾向は現在も続いておりまして、「過密化する都市」ということなのです。二〇一〇年では、二十パーセント弱の日本人が東京圏に居住していますが、この割合がどんどん上がっていきまして、二〇五〇年には三二・五パーセントになります。約三人に一人の日本人は、東京圏に住んでいるということになります。これに、三大都市圏である名古屋と関西を足しますと、三大都市圏の人口というのは五六・七パーセントになります。要するに、かつて日本人は全国津々浦々に住んでいたわけなのですけれども、そこからどんどん都市部に出てきて、その都市部も、地方中核都市にとどまるだけではなくて、東京、名古屋、あるいは京都・大阪・神戸に吸い寄せられていく傾向です。それが結果的に子育て環境の悪化という問題につながっていて、少子化を生んでいるということです。

そこで、日本の人口をどうやって増やせばいいかという対策が種々論じられています。私は、人口を増やすことはもうできないと思います。出生率が二人を超えたとしても下げ止まるまで時間がかかるからですし、二人になることもありえないと思います。それよりも減少の落ち込みをなるべくなだらかにしていくために、地方である程度生活できるという環境をどうやって作っていくのかということが一番肝心なはずで、この『エコノミスト』とことん考える人口減」という特集の中で、じゃあ、地方でどうやって暮らしていくのかという話がほとんどないということが、

やはり、この問題を考える上で抜けている視点なのだろうと思っております。

この「日本社会が直面する課題」というのを、幾つか箇条書きにまとめさせていただきました。私、北海道に住んでおりますので、北海道がどうなっていくのかということが非常に深刻な問題としてあります。大体、北海道は、今後二十間で百万人くらいずつ人が減っていくと言われております。しかし、札幌の人口は減らないですね。ということは、郡部の人口が非常に減っていくとあります。さらにTPPへの参加が生じると、北海道だけで農業では五千億円の生活の糧がなくなる。十一万人くらいの人が影響を受けるのではないかとされています。こういう人口減少社会とグローバル経済の中でどうやって生活していくのかということが、非常に大きな課題としてあるということがあります。

これに加えて、「現代宗教の課題」ということで、人口が減っていく地域の中で宗教施設というのはどういう役割を果たしていくべきなのか。これを考えていかなければいけない。現代社会において困難を抱えている人たちに寄り添える価値、これをどう創出できるのかということですね。これを考える際に、その価値がどこにあるのかというのを、もうちょっと客観的に考えてみたいと思います。これが、今日、私がお話しするメインのポイントになるのですけれども、それは、現代人の幸せについて考えるということです。

## 二 日本人の幸せ

人口が減っていく社会の中で、多くの人は不安を抱えております。この不安を政治・経済的に解消するというのは、実はなかなか難しい問題なのです。しかし、この不安というのは、私たちの思い込みによる部分というのもかなりありますし、私たちの、例えば価値観とか、生活態度であるとか、人間関係で、かなり変わる部分でもあるのです。不安が和らげられるというのはかなりあります。そのところで、現代宗教に何ができるのかということを、私は

考えてみたいと思っております。

この幸福について考えるということが、実は昨今ブームになっております。日本以上にヨーロッパではこの研究が盛んです。なぜ今こういう研究が出てきているのかということなのですが、私たちは経済的に豊かになっても幸せになつていくわけではないということが、だんだん分かってきたのです。そんなことは宗教のことを考えている人にとつては、初めから分かっていることじゃないかということなのですけれども、政治とか経済を動かしている人たちの発想というものは、経済的に豊かになればいろんな物を買うようになって、私たちの欲求とが満たされる、それが幸せなのだという、こういう理念に基づいて、いろんな経済政策を進めてきたし、経済成長を求めてきたわけなのです。その結果として幸せになつていないということが、ようやく問題になり始めてきたということなのです。

しかしながら、この幸せについて考えるというのは、実はなかなか難しいことでもあります。これはなぜかというところ、トルストイが『アンナ・カレーニナ』という小説の中で言っているのですけれども、「幸せな家族というのは、大体、皆、同じように幸せである。小さい家族であれ、大家族であれ、皆さん、仲良く暮らしていて、皆、同じように見える。しかし、不幸な家族は、皆、それぞれに不幸である」というようなことを言っています。豊かな貴族であっても、不幸な人は不幸であると、こういう話であります。これは幸せに関しても結構言えるところがありまして、人にとつて幸せって何かというと、人それぞれというところも結構あるようです。

文学等で考えるところの幸せというのは、少し常識から懸け離れている。そういうところにある幸せというのも、よく小説の中で描かれたりするわけです。倫理学で正義とか正しさとか幸せという議論をしますけれども、異なる価値観が対立した時に、どちらの価値観に基づいて、この幸せの議論をしたらいいのか。これは非常に難しいです。例えば、異なる宗教間の争い、紛争が起きた時に、どちらの理念を立てるべきなのかというのは非常に難しい問題です。そういう観点から、あまり幸せについて突き詰めるというのは、むしろ対立を助長するのではないかと、

やるべきではないということもあつたわけです。

しかし、今、もうちょっと新しい動きが起きております。その新しい動きの起きる理由なのですけれども、先ほどお話いたしました経済的な成長と、私たちの生活満足度が比例していないということです。一九八一年から二〇〇五年の間に一人当たりの実質GDPが伸びていったにもかかわらず、「日常生活に満足されていますか」という、こういう質問をした時に、この生活満足度は一九八七年からだんだん下がってきている。一貫して下がっています。この二十年間、日本は経済的にはあまり伸びてないと言われていますけれども、それはやはり日本の経済規模が非常に大きいためであつて、一人当たりの豊かさを見た場合には少しずつですが着実に伸びているのです。しかし、生活満足度は下がっている。一体、これはなぜなのか。

これは、最初に少しだけお話しました格差社会化も、非常に大きな要因だと思えます。私たちにとつて、日本というのは、「二億総中流時代」と言われたわけなのですけれども、皆同じ暮らしができる、皆平等に生活できるのだという非常に強い理念がありました。しかし、現実にはそうなっていかなくなつてきている。その兆候を感じている人たちが、「生活には十分満足できない」ということを言い始めているのではないか。これは、一つの可能性としてあります。実は日本だけではありません。ヨーロッパでも似たような調査結果が出ておりまして、これが一体なぜなのかということを考える研究が進んでいます。それが現在の幸せ感、幸福感研究がなぜ進められているのかという大きな理由でもあります。

この満足してない人たちのことを、もう少し見てみようということなのですけれども、これは内閣府の別の調査、「国民生活に関する世論調査」というものを利用してはいますが、どの世代の満足感が高くて、どの世代の満足感が低いのかというのを見ていきます。一九七七年を百として固定しまして、ここからどういうふうに変化しているのかと見えています。一番満足感が伸びているのが、二十代の人なのです。この九十年代後半から、二〇〇二年から二

○一二代にかけても伸びているのですね。そうしますと、格差社会化とか非正規雇用の増大というのは、主としてその若い世代が一番影響を被っているわけなのですが、その世代が実は満足感が一番高いのです。

その次に満足度が高いのが、三十代です。次いで、四十代と続きまして、次、七十代、六十代。一番低いのが五十代です。私、五十代の真ん中くらいなのですけれども、一番幸せじゃない世代となりますね。これはなぜか分かるでしょうか。多分、同じ世代の方は分かると思うのですけれども、要は、家のローンと子供の教育費ですね。これでおそらく小遣いはほとんど貰っていないという、こういう世代でありまして、一番生活が苦しい。多分、それで満足度が低いということだろうと思います。これも、世界各国で調査しても同じパターンなのです。中年男性というのは一番満足度が低いということです。注目したいのは、七十代以上の高齢者の生活満足度が低いということです。

日本の若い世代がなぜ満足度が高いかというのは、「サトリ世代」の話に属します。今日考えてみたいのは、七十代以上の方の生活満足度が非常に低いのは一体なぜなのかということなのです。客観的に考えてみれば、年金を掛けた分、そしてリターンの割合を考えると、七十代の人たちは一番恵まれているはずですが。しかし、主観的には満足していないのです。医療に関してもそうです。後の世代であるほど不満が高くなるべきですけれども、現実にはそうやってない。一体これはなぜなのかということなのです。

日本の高齢者の特徴というのは、アメリカと比べると、もっと大きな違いが出てくるのです。「幸福度のU字カーブ説」というのがありまして、要は、中年期というのは生活が大変になりますので、満足度が下がるのですが、だんだん年を取るにつれて、もう子育ても終わった、自分でいろんなことをした、満足だという人が増えてくる。ですから、高齢者というのは、生き残っている方はおおむね幸せになると、こういう話があるのですね。実際に、アメリカで調査をすると、アメリカの高齢者というのは、若い人よりもずっと幸せなのです。実際に、アメリカ

ところが、日本では若い人が一番幸せで、どんどん幸せ度が下がってきて、一番低いのが五十代後半から六十代頭

なのですけれども、七十代中盤を過ぎて、若干しか上がらないのです。これは一体なぜなのかということ。このことは、皆さんが檀家の方を相手にいろんなお話をされる、ないしはその気持ちを付度される際に、一つのヒントになるかなという気もいたしております。私が一番考えているのは、要は、この世代より上の世代というのは、親の面倒を見たということ、子供に面倒を見てもらえるという、いわば扶養の順送りというのが、家族的なケアが成立していた時代だと思ふのです。ところが、今の七十代・八十代の方、これは私の親も含めてそうなのですから、扶養の順送りが成立してないのです。

私自身、実は山形県出身なのですが、親は山形の片田舎にまだいるわけです。本来、私は長男ですから、山形の慣習に従えば、家に戻らなければならぬのです。ところが山形に仕事がないということで、現在は北海道の札幌で暮らしているわけです。そうすると、親目線で考えると、ほかの家族は、みんな長男が戻ってきている、ないしは婿を取っている。そういった家族と比べると、あまり幸せでないかもしれない。このこと自体、親不孝であるかもしれない。せし、一時期、私もそういうふうに行くと、いろいろと言われたこともあるのですけれども、今では、だれもその様なことを言わなくなりました。なぜかという、私の親が住んでいる地域というのは、みな同じ状況なのです。要するに、戻ってきている子どもと同居する人が稀です。職場が無いのですから。そういった時に、やはり相対的に、前の世代と比べて、「私たちって割を食っているのではないか」というところが、ひよつとしたらあるのかもしれない。しかも、私の親もそうなのですから、子どもに対して、あまり要求といいますが、「何とかしてくれ」ということが非常に言えない。とても遠慮がちなのです。私は、ひよつとしたらそういう感情の動きが、ここに出ているのかなと思っております。ただ、こういう、今まで苦労してきた世代が、この幸福感といいますが、生活満足度が低いまま、年を重ねていくということは、やはり寂しいことですね。ここは考えていかなきゃいけないのではないのかなと思います。

「生活満足度の国際比較」ということですが、日本というのはOECDの国の中でどのくらいの位置にあるのかということですが、真ん中より後ろの方です。一番高いのは、デンマーク、フィンランド、オランダといった北欧の福祉先進国です。これらの国々は、非常に高いです。アメリカも非常に高く、英国、イギリスもこの辺ですけど、韓国よりも、日本は実は後ろの方にありまして、これは、二〇〇九年のデータですね。日本より高いのがロシアなのです。日本の後ろにポルトガルがあつて、トルコ、スロバキア、ハンガリー、南アフリカ。こんな感じですね。これは低いと言わざるをえないわけです。

このように多くの客観的なデータもそろってきましたし、あとは、この幸福度の指標というのを、経済的な発展以外のところに求めるような動きがあります。ブータンでは、国民総幸福度という、新しい数値を開発しました。ブータンというのは、人口が大体七十万人くらいのヒマラヤの山国ですね。それにしても、みんな幸せなのだ。ブータン国王が来日した時に、「いやあ、男前だし、王妃様もきれいだし、なかなかいい国じゃないか」と思われた人も多いのではないのでしょうか。この三・四年でブータンに関わる本がどのくらい出たのか、アマゾンで調べてみたら、大体三十冊弱出ています。一種のブータンブームです。「みんな幸せである」。しかし、この数値の出し方というのは、ブータン独自の指標、例えば、「仏教を信じている」とか、「自然になじんでいる」とか、それも全部幸福度に加算していくのです。そこでは、物質的に多くの物を持っているとか、自動車を持っているとか、それをあまり重要視していない。結果的に、ブータンで考案された数値が高くなるような工夫はしてあるのですけども、それにしてもブータンの幸福度の高さというのは、日本に対してインパクトを与えました。

こういうことがあります。日本の幸福度が低いというのであれば、日本でも幸福度の高くなるような尺度を新たに作成したらいいのではないかと、政府で考えもしました。これはなぜかということなのですけれども、多くの国民が生活に満足しているということは、いわば、現政権を支持するか支持しないかということに非常に大きく関わり

ます。ですから、同じ政策を行うのであれば、満足度の高い政策をやった方がいいわけです。具体的に票に結びつきますから。従来のインフラ整備とか、公共投資などは、幸福度が高まらないのであれば、それをある程度抑えて、満足度を高める政策をどんだん行う方が票になるという非常に実質的な理由から、内閣府の方で「幸福度に関する研究会」というのを発足させまして、現時点でも様々な試みを行っているようであります。

客観的状况としては、三・一一以後の日本社会で、何が幸福なのかということも問い直され始めております。「無縁社会」という言葉が出てきましたけれども、人と人との絆ですね。これが大事ではないかと。あるいは、「脱原発」ということ、いわば、出てきた廃棄物が全く処理不能であるにもかかわらず、そういう科学技術水準で私たちはエネルギーを使っていくことがいいことなのかということも問われています。あとは、「定常型社会」、これは、千葉大学の広井良典先生が提唱されている議論でありますけれども、成長していくのではなくて、緩やかに落ちていったとしても、私たちが、安心していろんな機関、制度にケアを委ねられるような社会を作っていくことが、これから大事なんじゃないかと、こういういろんな議論が出てきまして、この幸福度の研究というのが非常に盛んになってきているわけであります。

では、内閣府が、この幸福度調査を行いまして、どういうことが分かってきたのか。その結果を皆さんと一緒に見ていきたいと思います。これもアンケート調査、大体、一人くらいにランダムにサンプリングした、そういう調査です。どういう人がより幸福度が高いのか。生活満足度が高いのか。そういうことを調べているのですね。男性より女性の幸福度は高いと。これ、一般的にそうなのです。なぜなのかというのは皆さんで考えていただきたいのですけれども、世界のどの国でもそうです。高齢者の幸福度は低い。これも日本の調査で分かっていることです。健康な人の幸福度は高い。これも常識的ですね。所得水準は幸福度にプラスの影響である。つまり、使えるお金がいっぱいある人は幸福であるということです。ただ、これも限度がありまして、大体、年収的に言うと、八百万円から九百万円

くらいが一つの上限でして、これ以上収入が増えても、人はあまり幸福にならないらしいのです。

既婚者は未婚者より幸福感が高い。最初はそうだと思います。そういうことを言うと問題があると思いますが。中には、持続的・発展的に幸福度を高めておられる方もおられると思いますけども、稀にそうでなくなつて、関係を解消した方がいいという、こういうことも生じてくるわけでありまして。あとは、地域での住民のつながりは幸福感にプラスです。人間関係がいいと幸せ感が増すということでありまして。所得の格差が自分の周囲で目に見える場合は、幸福感にマイナスであるということです。壮年期の失業は幸福感を低下させる。これも分かると思います。正社員、大企業勤務、管理職、公務員の幸福感は高い。これも大体分かるわけです。

そこで、どうしたらいいのかということ。女性が幸福感が高いのであれば、女性になったらいいのではないかというのも一つの考え方です。なれたらの話ですけれども。日本の人口を二分の一性転換するという非常にばかげた話であります。あるいは、健康な人の幸福感は高いので、なるべく健康寿命を伸ばしましょうという、これは分かれますよね。正社員、大企業勤務、管理職、公務員の幸福感は高い。それでは、公務員を増やしましょうとなるかどうですかね。現在は逆です。

私は、内閣府がこの調査をして、実は困っているのではないかなと思うのです。この結果をどう生かすか。むしろ、身もふたもない結果しか出ていないのではないかということ。ある意味で、いじりようがないことなのです。しかし、実は、私は考察すべきポイントとがあると思うのです。それは、「地域での住民のつながりは幸福感にプラス」というところ。ここは経済状況如何に関わらず、まだ工夫の余地があるのではないかと、ということなのです。それが、人々とのつながり、絆。これに対して、宗教施設というのが地域の中でどんな役割を果たせるのか。ここに私は関わってくるかと思えます。

ちょっと余談的になりますが、「心理学的な幸せの研究」をもう少し紹介しておきます。幸せを満足度としまして、

人生の満足度というのを調べていくと、面白い結果がいろいろと出ています。これは、アメリカの調査ですけれども、人生の満足度が一番高いのは、アメリカの大富豪です。巨万の富を得ているので、これは分かりますね。次に幸福度が高いのはアフリカのマサイ族です。自分たちは幸せであると言っている割合が非常に高い。

次は、アミッシュユダそうです。アミッシュユダは、元々はドイツのプロテスタントの一派でありまして、故郷で迫害に遭い、北アメリカに逃れてきた人たちなのです。二・三百年前に逃れて来たのですが、アメリカが建国される前から、ずっと同じ生活を続けています。馬車で移動し、テレビも見ません。携帯も使いません。皆さん、農業をしています。病気になる時だけ、自分たちのコミュニティの外の病院に行きます。「その時、お金がいるじゃないか。どうやってお金を稼ぐのか？」ということですが、農業で作った生産物や、豚を飼って肉を市場で売るとか、あるいは、自分たちで編み物をやっている、それを観光客相手に売るとか、そういうことで若干のお金を稼いでいます。それで、夜は八時くらいに寝てしまう。朝は五時位に起きて、昔ながらの生活をしているという、そういう人たちです。何が楽しいのかと周りから思われるかもしれませんが、生活満足度は非常に高い。その次に高いのが学生でして、一番下はホームレスの人たちになっていくわけです。この研究でも、私たちが考えている生活の満足度というのは、経済的な水準とか、社会的な地位というものは違う軸で決まるということが分かるかと思えます。

「年収と幸せ」の関係についてはアメリカのデータなのですけれども、日本の調査と似ています、五百万円から大体九百万円弱での「非常に幸せ」という人の割合は四一・九パーセントなのですが、九百万以上の人の幸せ度というのは、四二・九パーセント。わずかにパーセントしか増えていないのです。これも、いわば経済的な富の効果というのが限界効用的だということの証拠になるかと思えます。

他の調査データでももう少し見ていきますと、「幸せは何で感じていくのですか」というものです。家計の状況とか、健康、家族関係、精神的なゆとり。友人関係。自由な時間。充実した余暇。いわば、少しでも開拓・開発の余地があ

るような要素というのが幾つか見えてきます。「幸せになるために政府に期待すること」というのは、安心して子供を産み育てることができる社会の実現。これは、地域で暮らすということなのですけれども、これが、やはり上なのです。公平で安心できる年金制度の構築とか、その他いろいろあります。

次に、法政大学が研究している「四十七都道府県別幸福度ランキング」を見ます。どの県が一番幸せなのかという、何か余計なお世話のような気もしますが、研究者というのは何にでも関心を持って、何でも調査してしまうので、こういうことになってしまふのです。ランキング一位は福井県です。七・二三です。一番低いのは大阪で四・七五です。ランキング一位福井、二位富山、三位石川。北陸三県です。これを見た時に、ひよつとしたら喜ぶ宗門の方があるかもしれません。「いやあ、やはり宗教の力は強いよ」と言う宗門があるかもしれません。しかし、本当にそうなのかというところはあるのです。次に、鳥取、佐賀、熊本、長野。ずっと、続いていきました、わが北海道というのは、下から数えた方が早いです。五・一五。埼玉も低いですね。兵庫、高知、大阪も低いです。こういう結果が出されると、幸せな県の人は喜びますし、そうでない県の人は「何かおかしいのではないか」等といろいろ考えるかもしれません。

この幸福度を示す指標というのは、非常に多くの指標を取っています。出生率とか、下水道がどのくらい普及しているとか、赤字企業がどのくらいあるとか、交通事故件数とか、出火件数とか、犯罪に遭う確率とか、悩み・ストレスとか、いろんなものを足していって、こういうふうになっています。私は、この北陸三県、非常にいいなと思いつつ、しかし、この三県は、人口が関西地区と比べて多くはないです。私の、山形県出身者の実感をもとに考えてみると、こういう人口が少ない県で幸福度が高い人というのは、実は親の後をある程度継ぐことができる家業のある人、ないしは、安定した県庁職員とか市役所職員とか、非常に希少な民間企業に勤められる人ではないか。そういう人が残っているから、幸福度が高くなる。そうでない人は、都市に仕事を求めて出て行くわけです。ですから、大阪

が幸福度低いというのは、ちょっと気の毒なところがありまして、周辺諸県でなかなか安定した生活が営めない人が、やはり都市に出て行って、新しく生活を始める。こういう人たちが多いと思うのです。ですから、どうしたって、幸福度が高いところの近くにある都市というのは低くなってしまう。こういう問題があるのではないかなという気もいたします。千葉とか神奈川、やはり、幸せな方ではないのです。東京もそうではないです。このように、幸福の状況といえますか、生活満足度について考えると、いろんな要素が関係してくるといって、こういう話であります。

### 二 過疎と宗教施設

ここから、現代宗教に何ができるのか、特に仏教の話に移ります。

「宗教施設と過疎化」の問題に关しまして私は現在調査研究を進めているわけですが、この「人口の過疎と心の過疎」という修辭的表現を同時に聞くことがあります。心の過疎とは何かということですが、世俗化ですね。世俗化とは何なのかということですが、宗教に對する意識、これが非常に低下してくることであります。仏教の場合、檀家にならない、ないしはなれない人たちが増えてくる。これは、人口變動の影響であります。そうしますと、護寺会費・布施が当てにならない、当てにできないお寺が増えてくる。

神社神道でも同様のことが、既に起きております。仏教では、兼務寺院の数というのが三軒、四軒、それでも多い方だと思っております。神道の方、神社へ行きますと、二十社、三十社、普通にあります。地方の方に行きますと、四十、五十でも全然珍しくない。これは、要するに、春祭りと秋祭りをやればいいだけだから、もう兼務は幾らでもできるのだという話も聞くわけです。要は、一社だけで生活が成り立つなんていう体制は、もうとうの昔からありません。非常に兼務率が高い。

キリスト教・新宗教はどうなのかということですが、元來、家族とか地域に基盤を持っていないので、信者さん個

人が相手になります。言い方が少し悪いですけど、個人をつかんでいくしかないわけです。その信者さんが家族に自分たちの信仰を継承しなければ、その時点でもう切れていきます。日本の主流のキリスト教では、信徒の高齢化問題、そして信徒が減っていくという問題に悩んでいると思います。全然、牧師の生活が成り立たない。

日本基督教団というキリスト教の中で最大教派がありますけども、彼らの中で専業のみの人たちというのは三分の一くらいじゃないでしょうか。皆さんいろいろな兼務をしています。この兼務先が、幼稚園の園長ならかなりいいほうで、コンビニで働くとか、私の友人で回転ずしのパートをしている人もいます。牧師の場合、信徒に対する牧会、つまりケアがコンスタントにあるので、この時間だけ働くとは決められないのです。日雇いまでいかないまでも、パートのな仕事をやっている人が結構多いのです。新宗教でも、地方で全然信者が集まらなくて、都市に出ていって、出稼ぎじゃなくて、もう完全に移住したという話も聞きます。過疎化の影響というのは、いろんなところで出ているのです。

私は、文科省から科学研究費という調査費用をいただきまして、いろんな地域を調べているのですけれども、北海道の場合、利尻・礼文とか、夕張・栗山とか、標津・根室とか、せたな・檜山とか、いろんな地域で調べました。北海道というのは、札幌がある石狩地方と千歳・苫小牧、ここと帯広等の若干の地域を除けば、全部、過疎地域です。利尻・礼文島には、元々島民が二万人位いたのです。利尻島は、今、五千人から六千人ほどの島民になってきまして、観光業もあまり振るわない状況です。昔はみんな、北海道に旅行に行きまして、私も高校の時に北海道を一人旅。「北海道っていいな」と思って、それ以降、三十数年にわたって北海道に住んでいます。そういう人は、もう今の若い世代ではいません。

ですから、日本人相手の観光業というのは振るわない。中国や韓国、東南アジアの旅行者は増えています。なかなかここまで足をのばしてくれません。利尻島には病院が一つしかありません。そこは診療所的なものなので、あ

る程度重い病気の方は、利尻空港から飛行機で札幌の丘珠空港まで飛んで、札幌市内の病院を受診したり、入院したりするという状況が生じております。夕張市は炭鉱町で、最盛期には人口が十五・六万人あったところなのですが、もう一万人しかおりません。

こういう極端な過疎化が進んでいるところでは、廃寺になっていく寺院が結構あります。利尻・礼文に真宗大谷派だけで大体七箇所くらいあります。人口は両島合わせましても一万人もいません。しかし、寺院全体は各宗派合わせて二十数箇所あるのです。日蓮宗も入っています。それぞれの寺がそれぞれの檀家さんを守っているのですけども、一箇所あたり、もう五十軒に達していません。ですから、中学校を退職された先生が年金で住職をされているとか、基本そういう話であって、專業の方は一箇所だけでした。その一箇所だけの寺でも、このまま続けるといいうのは全く無理で、後継者もないということでした。後継者がいないという話では、標津・根室でも、後継者を探すのは非常に難しいということがありました。

過疎地の寺院をどう考えたらいいのかということでもありますけども、北海道では、真宗の場合は月参りがありまして、この月参りが寺院の経営的な基盤になっております。北海道の場合、教区を組（そ）といいますか、これが非常に広範囲です。一箇所が回る範囲というのは、組内と隣接地域含めて大体、大阪府と同じくらいの大きさなのです。どうしてそんなに広範囲に住んでいるのかということなのですが、散村・散居なのです。農家であれば、やはり農地も広いですから、ばらけて住んでいます。ですから、住職が運転する車の走行距離というのは、タクシーよりはるかに長距離です。

そんな状況なので、兼務をしながら住職を務めるというのは、非常に難しい。それで兼務をせずに專業されてきたのですけど、もうこれ以上無理だというお寺さんが、かなりありました。その中で聞いた、冗談のような話なのですが、けれども、要は、自分たちが一箇所一箇所寺で、門徒さん・檀家さんを守っていくというのは、もう無理であると。で

すから、むしろ、一箇寺一宗教法人ではなくて、宗門全体が一宗教法人のようになって、自分たちが従業員のような形で、この法人に雇用されるという道はとれないのだろうかとおっしゃられたご住職がおられました。例は創価学会だということです。伝統仏教や神社神道のような一宗教施設が一宗教法人となるのではなく、包括宗教法人だけでなく、被包括の宗教施設では宗教者が包括宗教法人の職員として雇用され、各寺院や別院の統廃合があれば移動、転勤すればいいというわけです。専従職員として安定的に働けるのであれば、布教活動もいろいろできるし、自分にとっても将来が見えてくる。しかし、現状ではそれが以上、一箇寺ごとにも期待されても難しいということが、ほとんどの寺院から聞こえてきました。後継者の確保というのも非常に大きな問題なのだという話ですね。

さて、こういう切実な声を踏まえつつ、どうしていったらいいのかということでもあります。個々の寺院が残っていくためには、兼務寺院を増やす、あるいは、兼職先を若いうちから考えとく、そういうことも当然必要だと思うのですけれども、それだけを考えていると、だんだん縮こまった考え方になっていくと思うのです。もうちょっと、今の現代人が一体何を求めているのかということから、寺院、あるいは宗教者の役割ということを考えていきたいと思えます。

#### 四 現代人が何を求めているのか

どこに人々の求めがあるのかですけれども、「自死しないしは自殺に向きあう僧侶の会」、あるいは、「いのちに向き合う宗教者の会」といった組織が出てきております。私、ここに何う前にタイに行っていたという話をご紹介いただいたのですが、そのタイには四日間行っていたのですが、その前には二日間、秋田に行っていたのです。そこは藤里町という町です。皆さん、聞いたことあるでしょうか。曹洞宗の袴田俊英さんという住職がおられます。

秋田県というのは自殺率が非常に高いです。秋田県の中でも、わけても自殺率が高いのが藤里町というところでし

て、人口が大体三千五・六百人なのですが、その地域で自殺された方というのがすごく多いのです。

藤里町において自殺されている方が、いわゆる独居高齢者かというのと違うのです。三世代で住んでいる高齢者が多いのです。それでは、家族の中でどういう孤独感を感じるのかが非常に問題になります。詰まるところ、家族の中で自分がする役割がなくなっていくという役割減少感の問題と、家族に迷惑をかけたくないというその気持ちです。これが強くなっていき、そういった気持ちを話す相手とか、話す場がこの町の中にはあまりなくなってきたというのです。そんな状況の中、一週間に一回集まれるようなカフェを開くという活動をされているそうです。これが一つの自殺予防であったりします。

この藤里町でもう一つ興味深い点は、引きこもりの方に対する支援活動です。人口が三千五・六百の町で、引きこもりと藤里町がみなして就業支援をしている人たちは現在で五十人位なのです。一時は、百二十人を数えました。これは、NHKの『クローズアップ現代』でも放映されたのですけれども、どう考えても多いです。私が直接行って、社会福祉協議会の方といろいろお話して分かってきたことは、我々が普通考える引きこもりの方というのは、学校に行けなくなったとか、あるいは就職に失敗して、家に閉じこもっている二十代の青年ではないかということですけれども、藤里町の場合は、四十代、五十代の方が実に多いのです。これは、結局は、秋田市、仙台、東京等に出ていったが、親がかなり年を取ったので戻ってくる。戻ってきた後、仕事がなかなか見つからない。仕事のない期間が、二年、三年、中には、五年、十年に及ぶ人がいる。親の年金がある程度あるので、小さく農家はやっているし、家がありますから、暮らせませす。そういう無業状態が非常に長い人がすごく多い。これを藤里町では「引きこもり」と認定したのです。

認定するとどうなるかというと、政府から自治体単位にいろんな支援事業が出ておりまして、就業訓練のプロジェクトを始めることができます。「引きこもり支援」という形で今やっているのですけれども、私が見た感じでは、ちょ

と違うのです。ただ、この引きこもりの人たちが多いというのは、その中から、将来に希望を見出せなくなつて、自殺される方の予備軍になりかねない方がいるわけなので、これを何とかしなければならぬと、袴田さんは考えられて、この引きこもりの問題と、高齢者の自殺問題との予防策の一環として、「いのちを考える運動」というのを推進されていて、地域の中で出来ることをやっていこうとされています。人口減少を変えることはできません。仕事を創出することも、なかなかできないです。しかし、この状況をソフトランディングさせるために、まだ工夫の余地があるのではないかと考えておいででした。

ここにお集まりの皆さんの中でも、同様の試みをされている方はいらつしやると思うのです。様々な地域の中で、まだまだ出来ることというのはあるわけです。その出来ることというのは、主として、人と人との関係を繋いでいって、孤立させないことが非常に重要であると私は思っております。その他、現代仏教のいろんな貢献的なことを議論する書籍もありますし、動きというのもあります。

ここで、もう一度、この幸せの研究に戻つて考えてみましょう。

「幸せ研究の到達点」ですが、私たちの幸せは主観的な満足度です。「本当に幸せか？」ということを手元に聞くのは、実は非常に難しいです。ですから、「現在、幸せですか?」「現在、生活に満足していますか?」ということ代替するしかありません。しかし、それを聞いていくと、家族、仕事、地域環境、人間関係と健康、性格というのが、結構関わっていることが分かってきます。

この「家族」は、最初に人口減少社会というところでお話した通り、未婚化・少子化が進んでおりまして、独居高齢者がどんどん増えています。この流れを直接変えるのはなかなか難しい。「仕事」も、非正規が増えていくということ。これは、政治・経済的な政策の問題ですけれども、これも変えるのがなかなか難しい。人口減・高齢化も、宗教の独力で変えるということは難しいと思います。ここまでは、非常に変えがたい。

しかし、「人間関係」は、これは町会でもいいですし、都市部であれば、市民のいろんな集まり、サークルでもいいのですけれども、まだ工夫の余地があると思います。そして、「健康」も、ウォーキングでもスポーツでもなんでもいいということです。さらに、これは医学的な研究がよく指摘するのですが、社会的な条件や客観的な条件以外に、本人の元々の気質とか性格というのが、幸せを感じるかどうかということに非常にかかわっています。簡単に言うと、楽天的な人は幸せになりがちである。すごく悲観的に物事を捉えている人は、いかに客観的に生活が恵まれていて、家族もそろっていて、仕事があっても、どこか幸せじゃない。これを突き詰めると、誰かが人を幸せにはできないって議論になってしまいますので、そこまで言いません。そこまでは議論しないで、価値観とか生き方の問題にまだ工夫の余地があるのではないかとこのことなのです。いわば、気の持ち方だと言えばそれまでですけれども、ある種の価値観を持つことによって、しあわせ度・幸福度を上げることがまだできるのです。

そこで参照したいのが、「希望学」という議論です。しあわせ研究の一部門なのですが、希望研究というのが、近年出てきている話です。これは、東大の社会科学研究所の方々が、希望とは何なのかと研究されているのですが、幸せとは少し違います。希望があるということの条件には、今が幸せでなくてもいいのです。将来、今よりもよくなるという見込みがあれば、希望があるということです。ですから、幸せでない人が多いとしても、希望を持っている人が少ないということではないのです。幸せでない人も、希望を持って何かをしていくように変えていく、ないしは変わってもらおうということは可能です。ここに着目しているのが、希望研究です。幸福というのは、どちらかというと、この状況が長続きすればいいな、今私はもう満足しているのだからという現状維持や保守的になりますけど、希望を持つと、何とかこの現状が悪くても、打破しようとして、改革的になり、物事に前向きにチャレンジするということなのです。

プロジェクトのリーダーである玄田有史さんは、どういう人が希望を持ちやすいのかということ、アンケート調

查を駆使しながら出してきたのです。これも面白い議論になります。自分がいろんな願い事を持っている。そして、実際に活動しているというのを、希望の条件としまして、どういう人が希望を持っているのか。一番目が、友人・知人に頼りにされている人。こういう人間関係を持っている人の方が、より希望を持ちやすいということです。次に、小学校から高校、ないしは大学までの学生時代の中に、親以外の目上の人から褒めてもらったことがある人。こういう人は希望を持ちやすい。「よく頑張ったね」とか、「まだもうちょっとできるのじゃない」とか、こんな事を言われた経験がある人は、そこで自尊心を持てるのです。これは希望の条件になります。

次が、宗教と関わっていることですが、信仰・宗教を持っていない人・行っていない人は希望を持ちにくいということですが、実は、この逆は真なりではないです。信仰を持っていない人の方がより希望が高いという調査結果は出てないのです。しかし、持つてなければ希望を持ちにくいということは正しいと。こういうことです。次に、「人間の本性は善である」と思う人の方が、希望を持ちやすいということですが、これは、どういうことかというところ、人を信頼できるかどうかということだと思ふのです。「他人を見たら泥棒と思え」と思ってしまうと、人を信頼できなくなりますし、人を信頼できないのであれば、自分が何かできないければ、もう、何もできないということになってしまいます。ところが、ほかの人を信頼できれば、自分ができなくても、ほかの人と一緒に何かができます。これは希望を持ちやすいということなのです。

「毎日朝食を食べる」人は、希望を持ちやすい。栄養学の先生は喜びますね。ああ、当然であると。朝食を食べなきゃ、エネルギーが出ないよということですが、私は、社会学者ですので、もうちょっとひねって考えます。朝食を取れるということは、個人としても、当然生活管理ができています。独身者であれば、かなり生活管理ができる。家族持ちであれば、家族が朝、一緒に会ってご飯を食べる習慣が確立しているということです。そういう人たちの方が、毎朝コンスタントに食事を取る可能性が高いわけです。ですから、そういう生活の規律、あるいは人間関係があ

る人の方が希望を持ちやすいというのは、これはこれで納得できる知見ですね。

最後になりますが、「過去三年間に心に傷を受けたようなことがある」人の方が、希望を持ちやすいということですね。私たちは最近、「トラウマ」とか、そういう言葉をよく使いますし、「心の傷」というのも、癒さなければならぬとか、いろんなことを言うわけです。災害があったら、心に傷を受けた人がいる。犯罪があったら、その被害者は心に傷を受けている。それを癒さなければいけない。それはそのとおりですけども、しかし、この傷を受けたところが悪いのではないということです。傷を受けて癒される過程の中で、その人がいろんなことを学習していく。この学習のプロセスの中に、希望を持ちやすい条件を作っていくことができるという話です。

もう少し別な言い方をすると、挫折を知らない人は非常に挫けやすい。一度でも挫折を知った人は、次どうすればいいかということ、目標を変更するとか、今まであまりにも高望みだった目標を少し下げてみるとか、別の方法を探すとか、要するに柔軟性ができてくる。ですから、そんな柔軟性を持っている人の方が希望を持ちやすいというのは、分かる議論なのです。ですから、その意味で、程度の問題ではあるのですけれども、心に傷を受ける経験をした人の方が希望を持ちやすいという話なのです。

こんなところを見ていくと、やはり私たちがどういう経験をしていくのか、そこから何を学ぶのか。あるいは、心の持ちようというのが、結構、希望を持つ、持たないに大きく関わるのだということが分かってくると思います。希望が持てるということであれば、現状、自分が生活に満足できていなくても、将来に向けて何かしようと思うことができる。これは幸福に準じる、そういう心の状態ではないかなと思うわけです。そうしますと、この希望の条件、ここに関わるような、いろんな活動、働きかけというのを、いわば現代宗教がどのようにやっていくのが、宗教が取り組める最大の領域としてあるのではないかなと考えております。

## 五 現代の不幸と幸福・希望

ここで、もう少し議論を広げたいと思いますが、私の専門の社会学では、この希望、ないしは幸福というものをストリートにはあまり考えていません。どういう人が幸せであるとか、あるいは、どうなれば幸せになれるのかということは、長らく考えてきませんでした。それよりも、世の中から不幸を取り除いていけば徐々に幸せになるということ、こういう考え方です。「幸福の加算から不幸の減算」。これは、哲学者の市井三郎さんの考え方ですけれども、不幸をなくしていくことが大事であって、その上に幸福の条件、幸福になれる生活基盤を打ち立てようという、社会福祉的な発想です。社会学はそのように考えております。しかし、その上に、先ほども言いましたように、希望を持てるような条件を考えていくことも大事じゃないかということです。

「現代の不幸」ということですが、これは関西学院大学の名誉教授の高坂健次先生がおっしゃっているのですけれども、現代の不幸というのは、非常にひねったところがあると。「貧しさの不幸」というのは、絶対的な貧しさではないのだということなのです。絶対的な貧しさって何なのかというと、発展途上国において、スラムの中で生まれ育ってしまう。教育の機会がない。だから当然、社会的にある程度評価されるような仕事に就く機会というものもない。場合によつては、ストリートチルドレンにならざるをえないというような。これは絶対的な不幸です。貧しさの不幸です。しかし、今日本を覆っている、この「貧しさの不幸」というのは、それとは少し違う構造があると思います。運・不運なのですけれども、日本社会の場合は、高度経済成長期、そして、まだ経済的に発展できた時期、この世代と、それ以降の世代では、やはり客観的な社会条件というのがかなり違ってきているのです。そういうところで、運・不運というのを世代ごとに感じているということがあるかもしれません。ただ、これは同じ社会の中ですから、あまり世代間対立ということを言い過ぎるのは非常に危険ですが。そういう運・不運は、どこに生まれてきたのかによって

決まってしまう。これは、もう世界的に見れば、日本の中での運・不運というのは、場合によっては誤差としかいようがない程度のものであるかもしれないけれども、当事者にとってはすごく重いのです。東京に生まれれば、あるいは、私のように山形県に生まれれば、それでやはりいろいろ条件が違うわけです。そういう問題です。

「格差の不幸」。これは、相対的剥奪と言っていますが、人は何を基準に物を考えるかによって、自分が客観的に豊かであったとしても、さらにいろんなものを欲しがったりします。隣の芝生は青く見えるとか、こういう話ですけれども、こういった相対的な剥奪感私たちは、すごく感じやすい時代に生きています。これはなぜかというと、ほかの人がどういった暮らしをしているのかということ、いろんなマスメディアの情報とか、あるいはネット、スマートフォンでいろんなやり取りを通して知ってしまいます。そういうところで、常に人と比較するような状況に私たちは置かれているので、相対的な不幸、相対的剥奪というのを感じやすいのです。私たちはこういう格差の不幸に見舞われています。

「豊かさの不幸」。ライフスタイルが非常に多様化している中で、どこに希望を見出したらいのかが少し見えなくなっているというのもあるかもしれません。

「非自明の不幸」ということで、グローバリゼーションを考えてみましょう。現在、地方で生活していると、三十年前、四十年前はいろんな企業が来て、そこで新しい工場を作って、中学校・高校を卒業して、安定した職業が得られたのに、現在は全く得られない。なぜ、ここに工場が来ないのか。それはグローバリゼーションのせいだと。工場が中国にいつてしまっているから。これは経済的にはいくらでも説明できますけれど、地域に住んでいる今の高校生とか若者にとっては、ちょっと分からないことかと思えます。生産基地が発展途上国に移動するのは安価な労働力と新しい市場を求める以上、資本主義的な生産・消費のシステムでは当然なのだと言います。しかし、他でもないなぜ今の私たちがそういう時代に生まれ合わせなければならないのかという問いに答えることは容易ではありません。

ません。なぜかということですね。日本がそういう時代に移行してしまったので、その世代、その地域に対しては、やはり日本全体で手当てすべきではないかなと私は思うのです。結局のところ、東京というのは、地方から多くの人材を吸収して成長してきました。現時点においても、どんどん吸収しているわけです。例えば、私が勤務している北海道大学。卒業生の一割しか道内に残りません。九割は、東京・関西へ流れていきます。そういう意味では、全く地域に貢献していない大学ですけども、こんな形で、人材がどんどん首都圏に吸収されていくわけです。それを成長エンジンとして日本が成長しているのであれば、その元々の資源を作っている地域にいろんな形でケアしていくというのが必要だろうと思っております。

私たちの主観的な幸福感というのは、生活の質や安定的に生活を営めるといふ基盤の上にしっぴりかみ合った形で歯車が回っております。この主観的幸福感には、我々の健康という要素も関わってきます。しかし、これだけではないのです。例えば、私たちが非常に慢性的な病を負って生活しなければならぬような場合、あるいは、老いの時期に、私たちはいろんなことができなくなるので、それで不幸になるのかというと、実際そういう状況の中で暮らされている方々は、必ずしも不幸ではないのです。そこに様々な生活の意味とか意義を見つけているわけなのです。それを支えている価値意識の問題があります。やはり人の生き方とか、社会の在り方に関して、理念を提供していく、私にはここにこそ宗教の役割というのがあるのではないかなと思っております。

社会というのは何かというと、地域単位で見た場合の人と人との係わり、つながりです。家族という単位で見た場合の人間関係です。これを豊かにするというのが、私たちの心がけでもありますし、つきあい方でもあるので、ここには、まだまだ工夫の余地、改善の余地があると思います。政治についても当然、改善の余地があると思いますが、こういう様々な要素がある中で、宗教というのは、どこで役割を果たせるのかということを考えていただきたいと思っております。その中で中心に据えるべき課題は、幸福ではないかと思えます。これは、宗派、宗門の枠を超えて、

様々な人に関わっていく際に、何をベースとするかというときに、私は、一つ有効な軸になるのではないかなと思っております。

最後にまとめたいと思います。「現代人の求め」というところで、幸福・希望というのを主に考えてみようということです。仏教は幸福・希望をどのように考えてきたのか。もちろん、教学上の理念といえますか、教えがあると思います。それを現代化しなければいけないということがあると思います。これは、もちろん信徒の方、お檀家さんに対して語る語り方と、そうではない語り方、例えば葬儀の法要等で、信徒・檀家でない方が来たときの語り方もあると思うのです。そういう時に、どう工夫していくのかということだと思います。

「寺院仏教が地域でなせること」ということですけれども、人間関係を再構築していくことではないでしょうか。今、非常に弱くなっているところで少し変えていく。あるいは、前向きな人生観ですね。前向きな人生観といっても、ものすごくポジティブにやることではないのです。あまりにもポジティブになり過ぎると、すぐに落ち込んだりするので、そうではなくて、少し明るくやっていくためにどうしたらいいのかというように思うのですね。どういう理念でやりますかということ。具体的な項目として、これまでやってきたこと。何をこれからやっていくのか。それを考えていただければ、私は現代宗教の課題っていうのは、おのずから出てくるのではないかなというふうに考えているのです。

この現代宗教の課題を解決するのは、宗門それ自体がやるべきだというのも、これも一つの考え方だと思うのですけれども、具体的には、やっぱり一箇寺一箇寺、その代表の立場にある人が、お一人お一人やっていくしかないのだらうと思います。上の方にものを頼んで何かしてもらおうという、こういう依存的な態度では、基本的に社会は変わらなと思うのです。これは政治の場合であっても、宗教の場合でも全く変わらないと思います。そういうできるところを少しずつでも探していって、何かやっていくということによって、エコノミストが描くような、「人口減どう

なるんだ？」というマクロな議論だけおこなって、地域とか具体的なレベルで、どうソフトランディング化を図っていくのかという、問題に対して何も答えてないことに対して、「いやいや、いくらでもやれる余地はありますよ」とこういうふうにお答えできるのではないかと思っております。

ここで私の話を終わりにさせていただきます。皆さんからのご質問やご意見があれば、さらにお答えしていきたいと思っております。どうも、ご清聴ありがとうございました。

**司会** 櫻井先生、お疲れさまでございました。ありがとうございます。十分ほど質疑応答の時間を取ってございます。どなたでも結構でございますので挙手をしていただければ。では、田澤顧問。

**質問1** はい。いろいろありがとうございます。田澤でございます。一点、後半、最後の方に出てきた「希望」という言葉が、一つの方向性を大事にしていく部分だと思んですが。私ども、今までは、「頑張れば大きくなる、よくなる」というような、そういう、一つの成長型の中で生きて、ずっと教育も受けてきた人間なのですが、いわゆる減少という、これからの社会の方向性を見た時に、それではいなくなる。例えば、私は茂原ですが、人口が十万人を超す、超すって言いながら、十年以上たつて、まだ九万台でいるという、これが一つの限界だろうと思っておるんです。恐らく、それ以上求めない方向性というのが、やはり我々も必要ではないかと思っておるんですが、その場合、この「希望」という言葉の持つ意味合いが、まだ、我々は大きくなっていく、より良くなっていくということが基本だという方向性の言葉で捉えているのですが、今、先生のおっしゃる、これからの日本の置かれた状況の中の、良くなっていくという意味合いが、物理的に大きくなるか、増えるとか、内容が増えていく、幅を持つといったことではない、もし方向性がある場合、この「希望」という言葉の何か一つの意味合いも、もうひとつ何か深めていた

けるとありがたいなと思っております。

**櫻井** どうもご意見ありがとうございました。例えば、「成熟」という概念はどうでしょうか。私たち人間の身体とということを考えた場合に、成長していく期間ですね。色々なスポーツをやって上達できる期間というのは限られています。そんなに、一生上達できるとか、一生どんどうまくなるなんてありえないですね。ある程度までいったら、その後は、ある状況をずっと保ちながら、それを楽しんでいくということではないでしょうか。つまり「成熟」ということが言えると思います。私、下手ですけど、テニスをやっているのですが、結構、高齢者の方で強い人、多いんです。六十代、七十代でも、若い人と対等にやれる人、いるわけですよ。一つ一つの動作は、やはり緩慢ですし、別に球は速くないのですが、試合をよく知っているんですよ。熟練といいますか。このように、そういう人たちが「成熟」を楽しんでいるということではないでしょうか。

あるいは、私たちが人生を生きていて、八十歳まで生きるといように仮定をしまして、体力的なピークというのは、恐らく三十から四十の間ですよ。そこからずっと下降線です。肉体的には下降線です。私、目も、遠くも近くもよく見えなくなってきましたし、いろんなことを忘れやすくなっている。いろんな意味で能力が落ちていくわけです。しかし、これを下降線と考えているのかということ。この、四十代から、なお人生を楽しむ。五十代でも楽しむ。六十代でも七十代でも楽しむということを、実際にやっているわけです。これを、私たちは、「加齢による成熟効果」と、やはり考えていると思うんですね。

私が先に示した、高齢者の生活満足度といいますが、このグラフですね。高齢者の生活的な満足度が大きく下がっていくというのは、やはり身体的な衰え、これによって、何かができないということ、非常に重く考えすぎなのじゃないかということですね。これは、やはり社会全体が、若い人にものごく焦点を当てて、何かができる、お金を

稼げる、こういう主体的な生き方だけを見過ぎていてのではないのかと思うわけです。人生、ある程度を過ぎたら、全部自分がやるのではなくて、仕事を人に任せるとか、委ねるとか、それも必要になってくるし、あるいは人生の晩年では、自分ができないから、本当に身体を人に委ねて、最後数年間を生きなきゃいけない。病気になった方は、この時期がもっと早まりますよね。その時に、生きる意義とか価値がなくなるのか、そうではないと思うんですね。要するに、そういう状況の中でも、人と係わることはできますし、あるいは、その係わってくれた人に対して、何かをお返することも可能だと思います。そういうことは、人間の成熟ということと考えられます。と同時に、日本社会が、人口が減って、高齢化していく。そこを成熟と考えた時に、どういうふうに関係が落ち着いていけるのかということですか。

このことは、私、海外の人と話した時に、「日本がやはり、八〇年代、九〇年代頭っていうのはものすごく鼻息が荒くて、ある意味、『自分たちが素晴らしい人間である』ってことを、本当に鼻っ柱が強いような形でやっていた、あんたがたは。ところが、最近になって、少し落ち着いてきて、何か文明国らしくなったんじゃないか」と言う。これは、ちょっと皮肉だと思うのですが、先に斜陽になったイギリスとかヨーロッパの人が言うわけです。そうすると、日本という国が実に魅力的になる。落ち着いているというわけです。ある意味、言い方悪いですけど、ちゃらちゃらしてないと。日本の中で残すべきものは何か。そぎ落としていいものは何か。これを冷静に考えるようになって、文化を発達させていくと、この文化がいろんな人を引き付けるという、こういう、私は社会の在り方というの、今後、考えられるのではないかなと思うんですね。成長著しい中国の人たちが、日本に観光旅行に来るのをすごく楽しんでるんですね。最初は東京とか大阪とか京都とかに行くのですが、そのうちに、地方都市へいくようになってくる。その中で、自分たちがものすごい成長のスピードで壊れていったものが、非常に落ち着いた形で残っている。それに対して、尊敬の念を覚えるという方もいらっしゃる。

私、昨年から八か月ほど香港中文大学というところで教えていたんですけれども、その学生で、日本に旅行するリピーターが実に多いということに気づきました。特に、社会人の学生ですけれども。その人たちが日本に対して関心を持っているのが、成長都市東京ではないのです。

地方の落ち着きであったり、職人さんが何代もかけて同じことをして、ちょっとしたところにも、なんか気配りが感じられるような、そういうものが自分たちの文化にないと。要するに、自分たちというのは、豊かになるために、ある程度豊かになったら、職人なんかばからしくてやっつけられないから、商売人になる、会社をつくる、富豪になる。こういう価値観でしか生きてない。しかし、日本では全く違う価値観で、落ち着いて生きている人が大都市にいたりする。「そういう人を見た時に、すごく落ち着く」と言うのですね。

こういう文化を作っていくというのが、私たちにこれからできるのではないのかなと。そういう時に、日本的な価値、文化というものが残すことができ、私は変にこのナシヨナリズムに触れた形で日本的な価値などというのを吹聴せずとも、自然に残るのではないのかなと思っていますね。どうでしょうか。

**司会** もう一問と思ったのですが、あと一分。手短に質問をしていただいて、手短に答えていただくということで、どなたかいらっしゃいますか。

**質問2** 先生、先ほど、北海道大学の卒業生の一割しか残らないという話があったのですが、北海道というところは、日本で一番短い開拓の歴史を持っているわけですけど、北海道も本州と同じように成熟期に入ったと思ってしまっているのか、それとも、もっと伸びていくところだと思って、もっとダイナミックにいろんな事をやっていいのではないかと。その辺り、先生のお考えを伺いたいです。

櫻井 ダイナミックにやれる余地はもちろんあると思うのですけれども、それは、例えば、ニセコ町とか、これはツーリズムとかかわっているわけなのですが、海外からいろんな人を呼び込んでいった中に、オーストラリアに非常に旅行の好きな人がいて、その人がいろんな起業をしかけていって、従来は冬のスキー客しか呼ばなかったのが、夏もラフティングとか、通年でいろんなことができるアウトドアのスポーツをやるような環境にしました。ここが若干ですけど人口が増加しました。そういう形で、外からいろんな人を呼び込むことによって、また新しく町をつくり変えられるという。よそ者に対して、北海道というのは、ある意味、差別しないですから、何か非常にかけたことを言う人がいても、「それはいいんじゃないの」ということで任せて、発展できる余地があるという点では、非常にまだダイナミックなところがあると思います。

しかし、全体としてこの過疎化傾向というのは、私は本州より厳しいと思うんですね。これはなぜかというと、さつき秋田県の藤里の話を出しましたが、要するに、秋田県の藤里町といっても、これは江戸期の前からそこに人が住んでいて、集落があるわけですよ。その先祖代々の土地を守らなければいけないというこの意識、ものすごく強固なものがありますね。北海道には、これがないのです。ですから、最後までその地を守って、そこに生きるっていう、何かそういう感覚がないので、いったん景気が悪くなると人口がものすごく異動しちゃうという、こういう弱さを持っていると思うのです。ですから、ダイナミックな部分もあるし、弱さもある。そういうところじゃないかなと思います。

司会 はい。まだ、いろいろおありになるかと思いますが、大変残念でございますけれども、お時間がまいりました。櫻井先生、大変お疲れさまでございました。ありがとうございました。

## 人口減少社会と現代宗教の課題（櫻井）

基調講演「人口減少社会と現代宗教の課題」

櫻井義秀 北海道大学大学院文学研究科教授

現代社会の課題と生き方を模索する時代  
人口減少時代  
原子力発電という負の遺産  
経済縮小期における地域社会・生き方の模索

現代仏教が直面する問題  
人口過疎とこころの過疎  
過疎地域における寺院の役割  
仏教に何ができるのか 葬儀・法要プラスα

### 社会変動と課題

人口減少社会・グローバル経済の時代  
日本の人口減少  
T P P 参加と産業変動  
地域定着型人口の時代？  
地域社会の課題  
防災福祉社会  
人口減、新産業の創出、地方自立  
現代宗教の課題  
過疎と宗教 宗教施設の役割再検討  
現代社会に寄り添いつつ支える価値の創出 ができるか？

ともあれ、これから30、40年後の日本は今とガラッと変わる

### 2030年の日本社会

地域社会に常住人口（子どもと高齢者）が増える  
キャリアアップ・高収入を求めるグローバルに働く人と、  
定型労働・生活給で働くローカルに働く人に分化  
行政サービスや社会保障の守備範囲が狭くなり、  
都市集住型と農村自活型に分化  
大学は地域立地の通学型と全国（全世界かもしれない）展開のオンライン型に分化し、  
学生は地元で通うかトップの大学を目指す  
人々の生き方・価値観は多様化

### 現代仏教が直面する課題

寺院仏教  
葬送儀礼の変容 直葬・檀家になれない人々  
護持会費・布施が当てにならない寺

### 過疎地の寺院をどう考えるか

- 1 経済的困難
- 2 門徒（檀徒）の流出
- 3 後継者の確保

では、寺院はどうしたらよいか？

現代仏教は何を目指せば良いのか？

寺院のサバイバル、宗派存続 △  
人々の求め・願いのありか ○

それを模索するあり方が、結局は、  
仏教のあり方を示し、教化にもなるのではないか？

寺とは何であったか？

多くは、道場、学林、布教の庵が寺格を得て  
現在の本堂・庫裡・鐘楼・山門を有する寺になった  
葬儀・墓苑に関わる寺の発生は近現代  
近世後期から200年  
時代が変わりつつある

どこに人々の求めがあるのか？

結びとして

- ・ 口減少社会では、家族・地域のつながりや豊かな社会関係を維持できる人々とできない人々との格差が顕わになる
- ・ 国や地方自治体による生活保護の機能には限界がある。憲法に保障された人権や社会権であっても、市民の納税による財政基盤と適切な支出へ導く世論なしに実質化されない。
- ・ 利他主義に基づく社会活動を志向する宗教に社会的絆の繕い方を期待するのは、的外れではないが、独善的な教団が日本に多いのは、宗教に公共的な役割が期待されなかった政教関係のゆえん
- ・ 現在の宗教者には市民の信教の自由へも配慮した社会活動をなす人々が増えてきている。

平成26年2月 千葉教区教化研究会議 「人口減少時代における宗教の役割」より